

4 C型慢性肝炎に合併した多血性胆管細胞癌の 1 切除例

渡辺 孝治・水野 研一・馬場 靖幸
石川 達・林 俊彦・吉田 俊明
上村 朝輝・坪野 俊広*・武田 敬子**
淡路 正則**・石原 法子***
石塚 基成****

済生会新潟第二病院消化器科
同 外科*
同 放射線科**
同 病理***
白根健生病院消化器科****

胆管細胞癌の vascularity は多血性から乏血性
のものまで様々であるが、今回我々はC型慢性肝
炎に合併した極めて多血性の胆管細胞癌の1例
を経験したので報告する。

症例は61歳、男性。近医のスクリーニング検
査で肝腫瘍を指摘され白根健生病院受診。C型慢
性肝炎に合併した非典型的肝細胞癌の診断で平
成15年4月21日当科紹介入院となった。血液検
査ではHCV抗体陽性、AFP 3.3ng/ml、PIVKA-II
20AU/ml、CEA 1.3ng/ml、CA19-9 19U/ml ICG
(R15) 16.3、(K) 0.117。US、CT、MRIではS5-
6径3.5cmの血流豊富な腫瘍であったが血管腫で
はなかった。また胆管の閉塞像も認めなかった。
血管造影でも実質相で極めて強く濃染し、CTAP
では門脈血流は認めなかった。またSMANCSを
注入したがLipiodolの沈着はなかった。各種画像
診断では確定診断に到らなかったためUS下生検
を施行。組織で腫瘍部は細胞異型および免疫染色
より胆管細胞癌を疑った。非腫瘍部は慢性肝炎
(A1/F1-2)であった。5月22日肝部分切除術を
施行。切除標本で腫瘍は白色で、組織は高分化腺
癌で一部低分化の部分も認め胆管細胞癌と診断
した。術後経過良好で6月10日退院となった。

5 著名な壊死傾向を呈した肝細胞癌の1例

青木 信将・船田 理子・玄田 拓哉
見田 有作・須田 剛士・渡辺 雅史
大越 章吾・市田 隆文・野本 実
青柳 豊・白井 良夫*・横山 直行*
石川 卓*・金子 耕司*

新潟大学医歯学総合病院消化器
内科学分野
同 消化器・一般外科学分野*

症例は52歳、男性。飲酒歴は3合/日を30年。
検診でアルコール性肝障害を指摘。2002年6月
肝S6に径6cmの腫瘍を指摘。精査目的に9月当
科入院。CTで最大径7cmの腫瘍を認め、dynam-
ic CTでは辺縁は徐々に造影、一部早期濃染像が
散在性にみられた。中心部は造影されなかった。
MRIではT1WIで辺縁部低信号、中央部やや高信
号、T2WIでは不均一な高信号を呈した。肝シン
チグラフィでは静注120分後に腫瘍辺縁に集
積し、長期の血流鬱滞を認め肝血管腫が疑われ
た。2003年9月AFPは異常高値を示し、10月に
腹部血管造影を行った。S6の腫瘍は若干の増大
を認め、S2に典型的な多血性の肝細胞癌を指摘
された。血管造影後、AFPは無治療で164,224
ng/dlから6,062ng/dlへと減少した。その後、肝
右葉切除+S2部分切除を行った。病理所見では
腫瘍部は出血性壊死で、ごく一部に肝細胞癌組織
が残存していた。腫瘍は厚い線維性被膜で被われ
ており幼若な腫瘍血管を伴っていた。

6 CO₂-DSAによりリザーバー留置し、化学療 法が奏効したヨード過敏の門脈腫瘍塞栓肝 細胞癌の1例

石川 達・渡辺 孝治・馬場 靖幸
太田 宏信・吉田 俊明・上村 朝輝

済生会新潟第二病院消化器科

症例は77歳、男性。2000年7月肝機能異常を
指摘され、当院受診。腹部造影CT検査ほか精査
にてC型慢性肝炎に合併した肝細胞癌の診断で
入院。この際はヨードアレルギーなどなく、腹部
血管造影施行し、SMANCS動注し、奏効してい
た。2002年、腎結石が疑われ、5月15日、腹部造